

論文

人は他者を支えるためにセルフヘルプグループに参加するのか？

——交換理論で読み解くセルフヘルプグループ——

白田幸治*

はじめに

近年、セルフヘルプグループ（以下、SHGと記す）が肯定的に評価されるようになってきた。約30年前に社会福祉の一部の研究者によって外来概念として紹介され研究が始められた当時、専門的な解決法を知り得ない素人がすることではないのか、と切り捨てられていた時代と比べれば隔世の感がある。しかしSHGを分析対象とする研究内容は、この間ほとんど変わっていない。生きづらさを抱えて孤立していた人が、同じ生きづらさをもつ人とSHGで出会い、交流し支え合うことで自らを解放し、さらに社会に働きかけ、やがては人格的な成長さえ達成するという理想を論じる。SHGのよき面に注目するという意味で、これらを理想主義理論と名づけよう。

しかし、現にあるSHGは既存理論が説くような理想的なものではない。同じ生きづらさを抱えているとはいえ、人というのは他者の話を聞くよりは自分の話を聞いてもらいたいものであるし、他人の回復より自らの安逸を願うものではないか。SHGといっても名誉心から役員の地位を独占したい会員もいるし、仲間の立ち直りをうらやむメンバーがいるかもしれない。さらに、集団である限りは構成メンバー間に権力構造が生まれるのは必然であるともいえる。理想主義理論が見なかった、これらの事由から多くのSHGは持続可能という課題を達成できずに消えて行くのが実情である¹。現実のSHGは理想論が述べるようには、うまく機能していない。

なぜ、既存理論はSHGに存する理想に違う要素を採り上げようとししないのか。理想主義理論は、各論者がそれぞれ関心をもつ視点からそれぞれが望む、あってほしいものをSHGのなかに見出し、それらを羅列する記述に終始し体系的な理論を構築しようという指向をもっていない。SHGに肯定的な専門職が援助技術論の枠のなかで行う援助を、より効果的にするための道具としてSHGを位置づけることにのみ注意を向けているからである。ここでは、理論分析よりもSHGの意義を流布することに主眼が置かれている。否定的な要因を明らかにすれば、せっかく勝ち取りつつある肯定的評価を失う危険があると考えからなのか。

しかし、何事でも事物に対する考察は、理想を思いつくままに描く段階から、明確に提示された概念によって論理的体系を構築する方向に発展するものである。SHG研究も、いまやその段階に入るべき時である。体系的理論が成立してはじめて議論を交わす理論的統一基盤が生まれるのであり、実際の困難およびそれへの対処について考えることができる。

本稿では、理想主義SHG論に対峙して、おもにP.M.ブラウの交換理論を分析枠組みとしてSHGを考察する。人は他者を支えるためではなく、自己利益を求めてSHGに参加するという見方をすれば、既存理論と異なるSHG論が導き出される。人間がどう行動するかを決めるのは現実的な利益指向であるという意味で、それを現実主義理論と名づけよう。現実主義理論によって、理想論が見なかった上述の事象が、なぜ支え合いを標榜するSHGで起こるのかを説き明かすことができる。

キーワード：セルフヘルプグループ、理想主義理論、交換理論、利益、対等

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2012年度入学 公共領域

1. 理想主義的 SHG 論

1-1 理想主義理論が向き合ったもの——専門職至上主義

SHG を研究対象としている学問領域は、おもに社会福祉学である。しかし、SHG を望ましいものとして論じる研究者は社会福祉学のなかでは、いまのところ少数派である。対人援助は専門性を会得した専門職が担うべきであると社会福祉学は主張し、自らの知識、技術、倫理を求め続けてきた²。生きづらさをもつ者への援助は、生きづらさをわかちもつ主体よりも、専門職が行うのがふさわしいと主張する。既存 SHG 論は、こういう社会福祉学の主張を批判するところから出発した。

たとえば中田智恵海はそういう援助のあり方を専門職至上主義とし、「専門職者の知識や技能だけが優越するわけではない、という点を強調し、専門職優位から脱却して主体的に自己決定することを可能にする SHG を強調したい」と述べ、専門職至上主義が SHG によって転換されることを期待する。しかし、既存 SHG 論も、専門職による支援をすべて否定するのではない。専門職との協働こそが SHG にとってよきあり方であり、それは当然、生きづらさを抱えている SHG のメンバーにとってもよいものであると述べる（中田 2009: 30-1）。SHG を肯定的に論じる社会福祉学研究者もまた社会福祉の専門職であるからには、当然の主張といってよいだろう。

こうして SHG は、SHG 論を唱道する社会福祉専門職によって、生きづらさを抱える者が主体的に決定することを目的とする自らの援助が、両者の協働によりうまく機能するためのツールとして位置づけられる。既存 SHG 論にとって、SHG は理想的なものではなくてはならないのである。

1-2 理想主義理論が説く SHG

ここでは既存 SHG 論の定義をとりあげて、既存理論が理想主義理論であることを確認する。A.H. カッツと E.L. ベンダーによる定義 (Katz, A.H. & Bender, E.L. 1976: 9) が有名で、日本で SHG が論じ始められたところから久保 (1981)、岡 (1990) など、その後の SHG 論を牽引した論者によって引用されている。

SHG とは、相互扶助と特別な目的を達成するための、自発的な小さな集団組織 (voluntary, small group structures) である。それらは通常、共通のニーズを満たし、共通するハンディキャップや生活問題を克服し、望ましい社会的かつ／または個人的変化を引き起こすために、互いに助け合おうと集まるピアによってつくられる。SHG の創設者やメンバーは、既存の社会制度によって／を通じては、自分たちのニーズは満たされていない、もしくは満たされ得ないと考えている。SHG は、面と向かって行う社会的相互交流 (face-to-face social interaction) とメンバーの個人責任を重要視する。SHG は感情的支持はもちろん、しばしば物質的援助も提供する。つまり SHG はしばしば主義志向 ("cause"-oriented) をもち、メンバーの人格的アイデンティティ (personal identity) の感覚を高めるイデオロギーや価値観を普及する。

カッツとベンダーの定義が、理想主義理論が提示する SHG をもっとも鮮明に記述しているといつてよい。いまある制度に頼らず、自らの生きづらさを解決するために自発的に集まり、交流し支え合い、そこから個人と社会の変化を展望する。さらには人格的成長さえも射程に置くという主張である。

次いで L.H. レヴィ (Levy, L.H., 1976: 311-2) も引かれることがある。

われわれの実用的な定義では、以下の 5 つの条件を満たす集団を SHG とする。

- ①目的——SHG の明確で主要な目的は、メンバーの抱えている課題 (problems) を処理したりメンバーの心理を有効に機能させるために、援助と支持 (help and support) を提供することである。
- ②起源と承認 (origin and sanction) ——SHG が存在する起源と承認が、外部の権威や機関よりもグループのメンバー自身にかかっている。……
- ③援助の源泉——SHG の主要な援助の源泉は……メンバーがピア関係にあるという構造の中でのメンバーの努力、技術、知識、関心である。専門職がグループの会合に参加しても……グループの意を受けたものであり、

補助的な役割を与えられているに過ぎない。

- ④構成——SHG は一般に、人生の経験や課題の共通する核心 (common core) を共有するメンバーからなる。
- ⑤統制——たとえメンバーが専門職の指導 (guidance) やいろんな理論的、哲学的理論枠組みを参考にしているとしても、SHG の構造と機能形態はメンバーの統制の下に置かれている。

レヴィはSHGと専門職との関係に焦点を当てている。グループの創設や運営を担うのはあくまでメンバーであり、メンバー自身が有する資源で援助を行うことが強調されている。専門職は補助的位置を与えられているに過ぎず、SHGはメンバー主導でうまく機能するという理想を述べている。

社会福祉学研究者以外の見解として、田尾雅夫を取り上げよう。組織論を主な研究領域としている経営学者の田尾は、当事者集団であるSHGから考察の対象を広げて、協同組合、地域通貨、さらには地方政府までを包含する「セルフヘルプ集団」という概念を提起している。田尾はセルフヘルプ集団とはなにであるかを考察するために、既存SHG論が提起するさまざまなSHGの定義を吟味する。そして「共通するところを概括すれば、メンバーによる自発的な参加で、互いに助け合うということであり、コモنزの形成である。……コモنزのためには、自助と互助が入り込み、互いに助け合うが、助け合う人たちは互いに思慮分別をわきまえた個人でなければならないということである。大筋としていえば、メンバーシップに仕切られた内向きの関心を抱いた集団」とまとめる。(田尾 2007: 28) ここでいうコモنزとは下記である。

コモنزとは、公平さに基づいた、そして互いに自由で強制しない関係 (mutual, free, and uncoerced, based in fairness) においては、互いに聞くこと、互いに支えること、そして、互いに感情的に支援すること (listening, support, and emotional help) を通して社会的な事実として構築される。要約すれば、以下の五つの特徴で定義される。

- ①自由で、しかも強制されない参加。
- ②共有された目標。
- ③目標達成のために必要ないっさいの資源の共有。
- ④単なる友人関係を越えた相互的な関係。
- ⑤公平や公正に裏打ちされた社会関係。(田尾 2007: 205)

田尾の考察は、上の2つの定義に比べれば、SHGと外部との関係には触れず、集団内部を中心にしたものである。自発性、相互性、自分たちがもつ資源で問題を解決できるという指摘、「公平や公正に裏打ちされた社会関係」は、理想のあり方を述べたものである。また「思慮分別をわきまえた個人」は、人格的な成長という論点とつながる。田尾もまた、既存SHG論を理想主義理論と総括したのである。

1-3 ホモ・セルフヘルピング

既存理論でSHGとはなにであるかを考察するときに議論されるのは定義のみでなく、思想的源泉、構造、機能、援助特性、専門職との関係なども含まれる³。それらも踏まえて、既存理論が前提としている人間モデルを「ホモ・セルフヘルピング」と名づけ、その要点提示を試みる。

ホモ・セルフヘルピングは、それぞれの生きづらさを抱えている。SHGに参加するまでは理解、共感してくれる他者はいないと思い、孤立感を抱く。しかしSHGに参加することにより、生きづらさは自分だけのことではなかったのだと分かり、孤立から解放され相互的な関係を築く。この関係のなかで、感情や情報などを交換し支え合う。SHG内では、支えることが支えられることであるという原則から、ホモ・セルフヘルピング同士は対等の関係を維持する⁴。

ホモ・セルフヘルピングは、専門職主導の支援では生きづらさから逃れることはできないと判断しており、自分たちの支え合いは専門職主導の支援パラダイムを転換するものであると考えている。ホモ・セルフヘルピングはグループ内でのやりとりでエンパワメントし、これまで理解してくれなかった外部社会に働きかけ、社会のあり方を

変える。グループ内部でのやりとりと外に向かっての活動により、ホモ・セルフヘルピングはより成熟した人格に成長する。

このように既存理論においてホモ・セルフヘルピングが集う SHG は、あってほしいよきもの、つまり理想が首尾よく機能する集団として描かれる。そして、現実の SHG で頻繁に観察されるメンバーの退出や他の SHG への移動、さらにはメンバー間の権力関係やメンバーの排除という事象は視野の外に置かれる。機能不全は想定されていないのである。

1-4 理想主義人間モデルと現実主義人間モデル

人間や人間が集まってつくる集団や組織の分析の基点になるのが、人間の思考や行動に関する理念型である人間モデルである。それらを大きく分けると、理想主義人間モデルと現実主義的なそれがあると整理できる。

あるべき、達成されるべき理想的なものを基準にする理想主義理論は、理想との偏差によって現実をとらえる。理想からの乖離の程度によって現実を規定することしかできない。結局は、現実を理想ととらえ現に生じている問題を抽出できないか、いまの状況を常に理想に近づく過程としてとらえ、理想状態の実現を永遠に成就できない恐れがある。そこからは現実のなかに視点を置き、現実を解き明かす方向は出てこない。従来の SHG 論が抱える最大の問題はこれである。

理想主義モデルの対極に位置する現実主義的人間モデルの代表例がホモ・エコノミクスである。ホモ・エコノミクスは、A. スミスに始まる古典派経済学からリカードを経て、現代の主流派である新古典派経済学に至るまで、経済学において理論の前提とされている、目的合理的に経済活動を行う人間モデルである。目的合理的とは、効用または利潤という自らの利益を最大にすることを至上の目的に、それを達成するために合理的に行動するという意味である。交換理論の人間モデルも、この範疇に入る。

2. 交換理論と SHG

2-1 交換理論の人間モデル

交換理論について、久慈利武は次のようにまとめている（久慈 1984: 29）。

交換理論と目されるものには、なるべく多くの社会行動や相互行為を交換行為という観点から解釈しようとするもの、社会制度、社会構造の生成、維持、革新を人びとの交換動機、交換行為の所産として解釈しようとするもの、経済外領域、市場外領域の社会生活領域に交換行為、交換関係として解釈されうる事象が多く存在することを探るもの、市場型経済が未発達、未分化の未開社会における取引交易あるいは交換・贈与慣行を対象自体に即した交換原理から解釈しようとするものなど種々の試みがある。

多様なバリエーションをもつ交換理論について、これで概括されているとあってよいだろう。そこで、交換理論のもっとも簡潔な定義を「交換という観点から経済的現象だけではなく、広く社会的現象をも説明しようという理論」（橋本茂 1993: 417）としておこう。

では、交換理論が説く人間モデルはどのように行動するのか。交換理論では「人間のなす行動はつねに費用と報酬が伴い、行為者は行動によって引き起こされる費用・報酬、そして自らのもつ社会的資産（学歴・地位など）にもとづいて行動する」（濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘 2005: 168）。ホマンズ（Homans 1974=1978: 21-69）は、より精緻な分析をしている。「人間行動についての経験的研究結果を説明する……一般命題」を5つあげているが、そのうちいまの論点に関連する3つを以下に記す。

成功命題——…ある人のある特定の行為が多くの報酬を受ければ受けるほど、それだけその人はその行為を多く行うであろう。

刺激命題——もし過去においてある特定の刺激……の出現が、ある人の行為が報酬を与えられた時であ

るなら、その時、現在の刺激が過去の刺激に類似していればいるほど、それだけその人はその行為……を行うようになるであろう。

価値命題——ある人の行為結果がその人にとって価値があればあるほど、それだけ彼はその行為を多く行うようになるであろう。

この価値命題は、「実行されなかった選択的な行為の放棄した報酬」と定義される「費用」と「ある人がある行為から得た報酬が彼が支払った費用を超過した分」と定義される「利潤」という概念を使って、次のように再公式化される。「ひとが行為の結果として受ける利潤が大きければ大きいほど、それだけ人はその行為を多く行うようになるであろう」。

その上でこれら3つの命題を要約するものとして、次の命題を引き出している。「合理性命題——選択的な諸行為の中から人は行為結果の価値 V にその結果を得ることでの確率 p を掛けたものが他より大きいと知覚される行為を選択するであろう」。

ブラウは、「人間行動に関する合理主義的な考え方」について、人びとは常に選択に関するすべての情報を得ているわけではないし、必ずしも最大の利益につながる選択をするわけではないという。つまり、ホモ・エコノミクスのような完璧に合理的に行動する能力を備えているわけではない。しかし、人びとは自己の利益をできるだけ大きなものにしようという「目的達成……に努めるといった仮定は、しごく現実的でまったく不可避なことのよう思われる」と書いている。(Blau 1964=1974: 15)

このように交換理論が前提とする人間モデルは、選択の合理性の範囲の限定と、経済的利益だけでなく社会的な利益をも選択基準にしているという2点を付加した、経済学のホモ・エコノミクスを修正した現実主義人間モデルである。

2-2 交換理論で SHG を考察する

2-2-1 社会的結合

カツとベンダーによると、生きづらさを抱える人びとは「共通のニーズを満たし、共通するハンディキャップや生活問題を克服し、望ましい社会的かつ／または個人的変化を引き起こすために、互いに助け合おう」と SHG に参集する (Katz, A.H. & Bender, E.L. 1976: 9)。相互扶助を強調する理想主義 SHG 論は、同じ生きづらさを抱えた人が互いにかかわり支え合うのは当然のことであると考ええる。

それに対して、交換理論は現実主義的に考察する。交換理論の現実主義人間モデルは、自己の利益がより大きくなるよう行動する。そうであるなら、他人とかかわり集まりに加わるのも、自己の利益を獲得するためである。ブラウは「個人が経験する満足は他者の行為に左右されている」、「社会的結合は報酬をもたらす」という (Blau 1964=1974: 12-3)。

この段階の議論で交換理論が提示する重要な概念は、「社会的報酬の交換」もしくは「互酬の期待」である。「他者に利益を与えることによって……社会的報酬が生み出されやすいという事実が、人びとがしばしば大きな労力を払って仲間を助け、そうすることに喜びを見出す主要な一つの理由」である (Blau 1964=1974: 11-3)。人が苦勞して同じ生きづらさを抱える人を支えるのは、それが自分の利益につながるからである。けっして相手を支えることに主目的があって、そのために自己犠牲を払うのではない。

2-2-2 社会的統合

生きづらさを抱え孤立していた人が同じ生きづらさをもつ人と出会う。そして彼らが交流を重ねることで SHG が形成され、さらにグループは一体化を増していく。理想主義理論では、一体感溢れる SHG が描き出される。では現実主義モデルでは、この過程はどう分析されるのであろうか。ここで問題にされるのは、社会的誘引である。

ブラウは、このことについて次のように述べている。「集団形成は、諸個人を一つの凝集の統一体に統一化する統合の絆の発展を意味する。この統合の絆は社会的誘引の絆でもある。諸個人が相互に、また全体としての集団にひかれる程度が大きいほど、集団凝集はそれだけ高まる。とりわけ、結合への内的誘引が共通の一体感を生み出すと

きそうである。」統合の絆があって、集合が集団になる。そして、統合の絆は誘引によって形成されるのである。誘引とは「他の人びととの結合を求める性向」である。そして現実主義理論では、ここでも基礎にあるのは個人の利益指向である。「ひとが他者にひかれるのは、他者との交際が報酬あるものと期待するから」である。(Blau 1964=1974: 29-30)

2-2-3 社会的支持

生きづらさを抱えた人は、同じ生きづらさを抱えた人と出会い SHG に参加することで支えられ、支え合い、生きる方法や生きるエネルギーを獲得する。すなわちエンパワメントできると、理想主義理論である既存 SHG 論はいう。しかし、支えられるメカニズムやどのように支え合うのかについては確かな論を展開し得ていない。それに対して現実主義理論では支えられること、社会的支持は報酬であるととらえる。

仲間を求め SHG に参加する、生きづらさを抱えた人の生きづらさとはなにであるのか。社会のなかでは生きづらさについて、さらには彼女／彼自身をも認めてもらえないから、生きづらいのである。だから他者に認められること、さらには他者に必要とされることは、なにより彼女／彼自身にとっては生きる支えとなるし、そうであるから現実主義理論では大きな報酬ととらえられるのである。

ブラウは、社会的支持の要素として社会的是認をあげる。一般に人は他者の是認を欲するが、とくに生きづらさを抱えた人は社会のなかで認めてもらえないことが通例であるから、自分が考えること、やろうとすること、生き方に自信をもてない。だから「人びとはその決定や行為、意見や示唆に対する社会的是認を得たいと願う。……是認は、彼らの判断を固め、行動を正当化し、信念を確認するのを助ける」(Blau 1964=1974: 54)。

以上のように、既存理論が記述する理想的な SHG の機能を、人は自己利益がより大きくなるよう行動するという交換理論の視点から社会的結合、社会的統合、社会的支持として説き明かすことができる。

2-2-4 機会費用

現実主義人間モデルは利益を求めて行動するが、当然のことながら費用もまた利益を割り出す重要な指針である。一般的には「個人が社会的結合から得る報酬は、別の報酬を得たであろう別の結合に時間（および他の限定資源）を捧げる機会を彼から奪うという意味で費用がかかっている」というところの「機会費用」を費用という (Blau 1964=1974: 89-90)。ホマンズは「費用……とは、実行されなかった選択的な行為の放棄した報酬である」として、さらに「ある人がある行為から得た報酬が彼が払った費用を超過した分」を「利潤」と定義している。(Homans 1974=1978: 45) ここでいう「利潤」は一般的な意味での利益ととらえてもよいであろう。

「時間と労力を別途に活用すれば、他の源泉から同種の報酬を、たぶん安い費用で、あるいはもっと良質のもので入手しえたかもしれない。そしてまた違った種類の報酬を手にしえたかもしれない」(Blau 1964=1974: 90) のであるから、同じ、もしくは少ない費用で、他の SHG の方がより多くの利益を得られるなら、また SHG に参加するより他の選択を実行することでより多くの利益を得られるなら、現に所属しているグループから離れるか、グループへの貢献をより少なくする可能性がある。つまり現実主義理論では、理想主義理論が見ようとしなかったメンバーの退出や他のグループへの移動をとらえることができる。それは、多くの SHG が立ち上げられては消えていくという事象の解明につながる。

2-3 ホモ・イクスチェンジング

以上、現実主義人間モデルの行動について社会的結合、社会的統合、社会的支持および機会費用という観点から考察した。これが現実主義人間モデルの行動に関する基本原則である。このことを踏まえて、SHG に参加する交換理論の人間モデルを「ホモ・イクスチェンジング」と名づけ、彼女ら／彼らが集まる SHG について論考を進めよう。

まず、ホモ・イクスチェンジングは、SHG が参加資格とする生きづらさにかかわる自らの利益を求めて参加するということを確認したい。この点は SHG の組織的脆弱性のひとつの根拠である。参加の利益がなくなれば、また他の機会の方がより大きな利益を与える、もしくはより少ない費用で同じ利益を得られる状況が出てくれば、参加を見合わせるということである。永続的参加の保証はない。

また既存の理想主義理論が説くように、生きづらさにかかわることが特定の問題に焦点化され、さらにメンバー間に共通の目的が成り立つわけではない。参加するそれぞれのホモ・イクスチェンジングが、SHGが掲げる生きづらさにかかわるそれぞれの利益を求めてSHGに参加するのである。

ホモ・イクスチェンジングは、他の機会で得られたであろう利益と比較してSHGから得られる利益の方が大きいと判断してSHGに参加する、という意味で自発的に参加する。参加の自発性は社会的圧力や誘導からの自由というよりも、自らの利益について判断し参加を決定するというところに根拠をもつ。たとえ社会的圧力や誘導があったとしても、その状況の下で自己の利益を判断して参加したのであれば、自発的参加といえるかもしれない。

ホモ・イクスチェンジングはSHG内で互いに社会的報酬を交換し合うことで、自らの利益を実現する。ここには、なにが自らの利益であるかはホモ・イクスチェンジングが判断するという前提がある。既存理論は自立や解放につながるかわり合いを指摘するが、それらのみが利益であると判断されるわけではない。さらに、相手にとって利益となるような報酬を提供できる者のみが、自分の利益となる報酬を相手から受け取ることができるという点も重要である。自らは得ようとするだけで他者になにも返そうとしない者は、互酬性の原理によりなにも獲得できない。さらにはSHGから排斥される可能性がある。

自立や解放もSHGの機能として一義的に導き出されるものではない。メンバーであるホモ・イクスチェンジング各自の利益として追求された場合に、SHGの機能として生じる。自立と対極にある依存を自己の利益として求めるホモ・イクスチェンジングが、依存を自分に提供できる他のメンバーに彼女／彼の利益となる社会的報酬を提供することができれば、両者の間で交換が成立し、SHGは自立と反対の方向で機能することもあり得る。

ホモ・イクスチェンジングが専門職および社会が生きづらの原因にかかわる、しかも生きづらさからの解放が費用を勘案した上でも利益であると判断するのなら、専門職との対抗および社会変革は、SHGの機能として導き出される。当然のこととして、専門職への服従および既存社会への同調を利益とするSHGおよびそのメンバーは存するはずである。ここでSHGの対社会の本質的な方向性はどのようなもので、それはなにによって規定されるのかという問題が生じる。

3. 現実主義理論が提示する課題

3-1 ケアの権力性という問題

上野千鶴子(2011)によると、育児を指していたケアという用語が、介護、看護、介助、さらには精神的な支えにまで、その意味内容が拡張されるようになった。ケアされる、ケアする関係とは、ケア・ニーズとケア・サービスの交換、相互行為である。ケアを受ける側はケア関係から脱退すれば生きていけないが、ケアする者はそうではない。ここにケアされる者とケアする者の相互行為の非対称性が存在する根拠がある。非対称性はケアが権力関係に変わり得る可能性を導く。そこから、ケア関係に付随する権力からの解放という課題が生じる。

通常、ケア関係においてはケアの与え手と受け手が分断、固定化されている。そこで、ケアの受け手による、ケア内容およびケアの与え手への管理可能性が、パターンリズムに陥らないための要件とされる。これが、いわゆる当事者主権論である(中西・上野2003)。ただ、ケアされる者が当事者主権を担うには、自らに与えられるケアがどのようなものであるなら自己にとって有益であるのか、ケアする者がどのような行為をすれば自分が快適なのかが分かなければならない。当事者主権論では、自己の利益に関して判断能力をもち、その判断に基づいて自己決定できる主体が想定されているといわなければならない。

一方、SHGの機能である支え合いも、意味内容を拡張したケアの一種であると理解しても誤りではないだろう。SHGにおける支え合いは、同じ生きづらさを抱える者同士による、ケアの与え手と受け手の互換であり、ケアの理想型である。ケアの場における支配からの解放策の一つであるととらえることができる。同じ生きづらさを抱える者同士だから、ケアの与え手が提供するケアの中身は受け手にとって適合するものとなり得る。

しかし、交換理論で読み解いたSHGにおいては、人は自己の利益を求めてSHGに参加する。そこで前提にしたのは、自分の利益がなにであるかを認識でき自己決定が可能で、かつ他者と交換できるなにかをもっている主体である。同じ生きづらさを共有していても、自己の利益に関して判断能力をもつことができず、その判断に基づいて

自己決定できない者や他者になにも与えることができない者、すなわちケアを受けるだけの者は SHG から排除される。

3-2 他者に利益を与えられない者

他者になにも与えることができない人は、SHG で受け入れてもらえないのか。しかし、現に所属しているグループでは他のメンバーになにも与えることができない者であったとしても、他の SHG では、そのメンバーが自らの利益ととらえるなにかを提供できるかもしれない。なぜなら、自己にとっての利益がなにであるかを決定するのはそれぞれの主体であり、交換の相手が替わればなにが利益であるかも違って来るからである。こうして自己を交換の相手としてくれる者を求めて、ある SHG では他者になにも与えることができない人として排斥されたホモ・イクステンジングは他のグループに参入しようとする。

また、他のなにもものをも与えられないにしても、相手の意見の是認や相手を尊敬することはできる。それは他者に対する報酬となる。ただ、地位が低い人の是認の価値は低い。相手は、もっと価値がある人からは是認や尊敬を受ける機会をもっているからである。だから地位が低い人は、より多くの是認や尊敬の提供を余儀なくされる。そのことがまた、彼女ら／彼らの是認や尊敬の価値をもっと下げてしまうのである (Blau 1964=1974: 54-6)。

他のなにもものをも与えられない者には「相手に服従しその要望に応じることによって……相手が自分に対して権力をもつことを認めて、相手に報い」という選択肢もある。「相手の要求に喜んで応じることは一般にみられる社会的報酬」である (Blau 1964=1974: 17-8)。

他者に対する是認や尊敬、服従を差し出すことによって、他者になにも与えることができない者もグループから排除されない見込みがないわけではない。しかし通例は、是認や尊敬の価値の切り下げ、他者に服従することは耐え難い、できれば避けたいことである。それにもかかわらず受け入れるのは、それに見合う利益を得ているからであると現実主義理論は考える。この利益とは、社会的結合、社会的統合、そして社会的支持である。他者との結合や統合、他者からの支持は、それ自体のなかに報酬があると交換理論は説くのである。

あるグループでは自らが差し出すものを利益と認めてもらえない者は、利益ととらえてくれる他の SHG を求めて現に所属するグループから離脱する。しかし、そういう SHG を見出せなかった者は、服従を提供して現集団に留まるしかない。また機会費用の観点から、他のグループに移るより権力者に従っていても、いまのままの方が自らにとってより多くの報酬を得ると判断される場合もあるだろう。こうして、SHG と名指されている集まりのなかには、理想主義理論が SHG であるための重要な要素であるとする対等の関係からほど遠い集団があるということを現実主義理論は解き明かす。

さらに他者になにも与えることができない者が服従を差し出す相手として、彼女ら／彼らが参加する SHG にかかわる専門職を想定することができる。専門職との結合や統合、そして専門職からの支持は、他者になにも与えることができない人にとって利益となるからである。こうして、理想主義理論が記述する協働関係としてではなく、権力関係としての SHG およびそのメンバーと専門職との関係が説き明かされる。

結語にかえて——自己決定できない者へのケア

従来の SHG 論が前提とする理想主義人間モデルは自己決定可能な主体である。中田が専門職至上主義を批判するのは、「専門職者に任せていれば何とかなるといふ幻想」によって「専門職者の知識や技能の活用を自分自身で決定して……その結果についての責任を自ら引き受けて生きる」ことができないからである。そこで「主体性を獲得する手だての一つ」として SHG が意味づけられる (中田 2009: 86)。互いの生きづらさを分かり合うことができ、情報のやりとりができ、自らを信頼でき、自分たちに無理解な社会への働きかけができ、さらには人格的に成長するには、自己決定が可能でなければならない。

交換理論では、人間は自らの行動が引き起こす報酬と費用を勘案して行為すると説かれた。言い換えれば、現実主義人間モデルの自己決定とは、自分の利益がなにであるかを判断し、自己利益がより多くなるように自分がなにをするかを決定することである。現実主義 SHG 論は、自己決定できない者を想定していない。SHG から視野を拡

大して全体社会におけるケアの意味を考えると、ケアの受け手の多くは自己決定できない当事者ではないか。彼女ら／彼らに関わるケアを考えると、同じ生きづらさを抱える人びとの集まりにケアの根源を求めることはできない。

さらに、ケアを受ける者による、ケアの中身およびケア提供者への管理・支配を志向する当事者主権論においても、自己利益に関する考察とそれに基づく自己決定可能な主体が想定されている。こうして、本稿で検討した理想主義 SHG 論、交換理論による現実主義 SHG 論、さらに当事者主権論において、自己決定できない者は考察の外に置かれている。これらの理論枠組みは、自己決定不能な者を包摂しないということである。

では、自己決定できない者へのケアは誰が担うのか。以上の3つの理論がケアの主体の位置から引きずり下ろした専門職なのか。もし、そうであるなら、専門職が主体的に担う、自己決定できない者へのケアには、ケアの受け手を抑圧する権力は付随しないのか。しかしながら、自己決定できない者と彼女ら／彼らへのケア提供者とは圧倒的な非対称関係にあると想像できる。そうであるなら、ケアの権力関係から解放される経路はあるのか。こうして再び、問題はケアの専門性へと戻る⁵。

注

- 1 セルフヘルプ支援センターがディレクター作成に取り組んでいるが、短期間で消滅する SHG が多いことがその仕事を困難にしている。
- 2 現状では、それらはきわめて浅薄なものに留まっており、独自の体系を獲得できていない。社会福祉学研究者自身がこのことを認めている。山縣文治（山縣 2007: 18）は社会福祉学の初歩的テキストで「社会福祉の専門性は……現状では、科学としての固有性を論ずることができるほどの状況にはなっておらず、制度や政策が決める分野としての固有性程度しか確立していません」と述べている。
- 3 既存理論は SHG の思想的源泉を S. スマイルズの『自助論』と II. クロポトキンの『相互扶助論』とする。構造および機能については A.H. カッツ（Katz, A.H. 1970）、援助特性に関しては中田（2009: 16-36）を典型としてあげておく。
- 4 SHG の思想的源泉とされるクロポトキン（Kropotkin 1912=1967: 521）は「国家における社会的平等の欠如」を批判し「正義が可能となるのは、平等者の社会であるにすぎない」と、目指すべき社会を構想している。
- 5 もし、自己決定できない者のニーズを専門職が客観的に判定できるとすれば、彼女ら／彼らは専門職に服従を差し出すことによって自らの利益を得ていると考えることもできる。そうであるなら、現実主義理論は自己決定できない者も包摂し得ると主張できないわけではない。

文献

- Blau, P.M., 1964, *Exchange and Power in Social Life*, New York: John Wiley & Sons, Inc. (=1974, 間場寿一・居安正・塩原勉訳『交換と権力——社会過程の弁証法社会学』新曜社.)
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘, 2005, 『社会学小辞典 新版増補版』有斐閣.
- 橋本茂, 1993, 「交換理論」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学事典』有斐閣, 417.
- Homans, G.C., 1974, *Social Behavior: Its Elementary Forms*, 2nd ed, New York: Harcourt Brace Jovanovich Inc. (=1978, 橋本茂訳『社会行動——その基本形態』誠信書房.)
- Katz, A. H., 1970 "Self-Help Organization and Volunteer Participation in Social Welfare," *Social Work* 15 (1) :51-60
- Katz, A. H. & Bender, E. I., 1976, *The Strength in US: Self-Help in the Modern World*, New York: New Viewpoints.
- Kropotkin, P., 1912 *Modern Science and Anarchism*, London: Freedom. (1967, 勝田吉太郎訳「近代科学とアナキズム」猪木正道・勝田吉太郎『世界の名著 ブルドンバクーニンクロポトキン』中央公論社) 久保絃章, 1981, 「セルフ・ヘルプ・グループについて」『ソーシャルワーク研究』, 16 (4) :54-60.
- 久慈利武, 1984, 『交換理論と社会学の方法——理論社会的アプローチ』新泉社.
- Levy, L.H., 1976, *Self-Help Groups: Types and Psychological Processes*, *Journal of Applied Behavioral Science*, 12 (3) :310-322.
- 中西正司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』岩波書店.
- 中田智恵海, 2009, 『セルフヘルプグループ——自己再生を志向する援助形態』つむぎ出版.
- 岡知史, 1990, 「セルフヘルプグループの概念をめぐる——欧米の代表的な概念の研究を参照しながら」『社会福祉学』, 31 (1) :102-127.

- 田尾雅夫, 2007, 『セルフヘルプ社会——超高齢社会のガバナンス対応』 有斐閣.
- 上野千鶴子, 2011, 『ケアの社会学』 太田出版.
- 山縣文治, 2007, 「社会福祉の専門性」 山縣・岡田忠克『よくわかる社会福祉 第5版』 ミネルヴァ書房, 18.

Do People Participate in Self-Help Groups to Assist Others?: Critical Thoughts on Self-Help Group Theories Based on Exchange Theory

SHIRATA Kouji

Abstract:

Existing self-help group theories argue that people with life-disrupting problems can assist each other and attain desirable changes in themselves by joining self-help groups. However, actual self-help groups do not function as existing self-help group theories insist. This paper presents a more realistic theory as an alternative. First, the paper verifies that existing theories are idealistic. Second, it defines the human being model in exchange theory, and considers self-help groups according to this theory, which posits that behavior is based on personal benefit. Therefore, it is self benefit not mutual assistance that motivates people to join self-help groups and interact with others having similar problems. A person perceiving no personal benefit in joining a self-help group will either not join it or leave it. Exchange theory also posits that one enters into exchange with others by offering benefit to others. A person benefiting from participating in a self-help group and desiring to remain in the group, may perceive that he or she has nothing to give in exchange, however. In this case, one benefit such a person can offer is obedience to some influential members of the group. If this is so, we must conclude that members of self-help groups are not necessarily equal.

Keywords: self-help group, idealistic theory, exchange theory, profit, equal

人は他者を支えるためにセルフヘルプグループに参加するのか？

——交換理論で読み解くセルフヘルプグループ——

白田 幸治

要旨：

従来の SHG 論は、生きづらさを抱える人びとは SHG で支え合い成長すると主張する。しかし、現実の SHG は既存理論が説くようにはうまく機能していない。本稿は、既存理論に替わる現実主義 SHG 論を提示する。まず、既存 SHG 論が理想主義理論であることを確認する。次に交換理論の人間モデルを明らかにし、交換理論を分析枠組みとして SHG を読み解く。交換理論においては、人は自己利益に基づいて行為する。同じ生きづらさを抱える他者にかかわり SHG に加わるのも、自らの利益のためである。他者と支え合うためではない。そうであるなら、参加の利益がないなら参加しない、もしくは脱退するということである。交換理論が前提にするのは、他者に利益を与えることができ、他者と交換できる者である。他の何ものも与えられない人は、もし留まることが利益なら、服従を提供して集団に留めてもらう。SHG は、必ずしも対等な関係であるわけではない。

